

小説版 刃野博士と真倉助手のガ  
イアメモリ研究所

バリー

ここは、ミュージアムのガイアメモリ研究所。今日も悪の科学者たちが、恐怖のメモリ実験を繰り返している。

# 目次

始まりはA\禁断の果実



## 始まりは A/禁断の果实

ここは、ミュージアムのガイアメモリ研究所。今日も悪の科学者たちが、恐怖のメモリ実験を繰り返している。

「出来たぞ、真倉くん！また一つ、新たなメモリを開発した！」

白衣を着たお笑い芸人に、いそうな顔つきの男性——『刃野』博士が、メモリが入った袋を得意気に見せる。

「本当ですか、博士！」

同じく白衣を着ており、激しく感心をしている男性は、彼の助手である、真倉である。

ちなみに、風都でガイアメモリ犯罪の解決に勤しんでいる『超常犯罪捜査課』に彼らと同じ顔と名前の刑事がいるが、彼らとは全くの別人である。

別人である。

「そうだ。しかもこれを使えば、あのウェザードーパントに勝てるかもしれないのだ！」

「ええっ!? そんなに強力なメモリなんですか!？」

「その通り! それがこれだ!」

そう言うと刃野は、袋からメモリを取り出して真倉に見せた。

色は赤で全体に化石の骨の様な装飾があり、内部には三角形の穴が林檎になっている『A』が描かれている。

「これぞ私が開発した『アップル』メモリだ!」

「『アップル』ッ!? それでどうやって勝つんですか?」

真倉がこう聞いたのも無理はなかった。どう見ても、雑魚っぽい感じがするメモリだったからだ。

それを聞いた刃野は、得意気にこんなことを聞き始めた。

「真倉くん、『一日一個のリングは医者を遠ざける』という言葉は知っているな?」

「え? あ、はい。知ってますけど……。」

「『アップル』は日本語で何という意味かな?」

「『リング』ですけど。」

「ウエザードーパントに変身する『井坂深紅郎』いさかしんくろうの職業は？」  
「『医者』ですけど。」

「つまりそういうことだ。」

「なるほど——」

何が『なるほど』なのだろうか。謎の納得の後、テンションが上がった真倉は刃野に言った。

「じゃあ早速、変身してみましようか——！」

「よし、来——い——！」

「『レッツメモリトライ』——！」

「**アップル**——！」

真倉はメモリを起動すると、刃野の右腕に挿した。

これが彼らの悪い癖である。メモリが出来上がるとすぐに自分や他人の体に挿し、効果を試したがるのだ。しかも生体コネクタを打ちこまずに。

普通ならば挿した部位がメモリの毒素に直に汚染され爛れた痕が残り、その痛みに苦しむことになるのだ。にも関わらず、何故か誰もその様な状態に陥っていない。

直挿しダメ、ゼツタイ。

メモリを挿された刃野は光に包まれた。

数秒後、刃野は『アップルドーパント』へと変身していた。

といっても、その姿は怪人というより、『全身黒タイツを着て、リングゴの被り物した刃野』以外に言い表せない姿であった。ご丁寧に顔面まで、リングゴと同じ赤で塗り潰されている。

正直言って、ライタードーパントをおびき寄せるために翔太郎が着た『電波塔の道化師』コスチュームよりも質が劣っている。

ハッキリ言って、弱そう。

にも関わらず、真倉が持ってきた鏡を見た刃野は

「おおっ、これは中々強そうな姿だね〜！」

とコメントした。ガイアメモリに精通している者の感性は、常人とは異なるのだろうか。

「博士！早速、ウエザーのところに行ってコテンパンにしちゃいましょうよ！」

「

「よし、真倉君！いざ、『井坂内科医院』へ **Ready go!**」

やたらとやる気満々で、二人は研究所を出ていった。

しかし、彼らは知らなかった。いや、知らなすぎた。

『井坂深紅郎』という男が、どれほど恐ろしい人間なのかを……

風都にある『井坂内科医院』。

ここは表向きは人間の体を診る施設だが、裏ではなんとドーパントの診察を行っ

ているのだ。

そこで働くのは、医者である『井坂深紅郎』。

シルバーメモリの『ウエザー』の持ち主であり、仮面ライダーアクセルこと照井竜にとっては家族の仇でもある。

「次の方どうぞ。」

彼がこう呼ぶと、診察室の扉が開いた。

次の瞬間、

「さあ、覚悟しろ　！井坂深紅郎！」

刃野が変身したアップルドーパントと付き添いの真倉が入ってきた。

「な、何ということだ……。」

井坂は恐怖のあまりか、刃野の姿を見て体を震わせている。

「フッフッフッ、驚いたかね　？　医者であるお前が最も苦手とする『リンゴ』の力を俺は手にしたのだ！　これでお前をなぎ倒してやる！」

「降参するなら今の内だぞー　！」

得意満面に言う刃野と、煽る真倉。

そんな彼らを見る井坂の体はまだ震えが止まっていなかった。それを見て二人は勝利を確信した。  
だが、

「素晴らしいっ !!」

「……へ ?」

なんと井坂は満面の笑みで、刃野の下へと駆け寄ってきたのだ。

「なんて珍しいフォルムなんだ ! 特にこのリングの皮の艶やかな赤 ! まさに

『禁断の果実』だ !」

「は、え、ちょっと ?」

彼は刃野の頭部のリングの被り物を撫でたり頬ずりをし続ける。

その姿に二人は戸惑いを隠せなかった。

言い忘れていたが、彼はドーパントの肉体に目がない変態である。

どうやら先程体が震えていたのは、恐怖ではなく感激のためだったようだ。

「貴方の様なドーパントは、見たことがありませんねえ。実に興味深い。その体にはどんな秘密が隠されているのか

是非とも、私が診察してあげましょう。」

ダイロリツと高速で舌舐めずりをし、刃野に野獣ビーストの様な眼光を放つ井坂。

それを見た二人の背筋に悪寒が走る。

「ま、真倉君。これは、結構マズいんじゃないか？」

「そ、そうですね、博士。逃げましょうわあああつ！！」

慌てて彼らは逃げ出そうとするが、動揺していたのか、つんのめって転んでしま  
う。

「さあ……おいで。大丈夫……痛くしないから……。」



・アップル（APPLE）

文字デザイン…三角の穴がリングになっている『A』

詳細…霧彦が持っていたスニーカーの中に入っていたメモリの一本。後にコン  
セレで商品化された。

『今日のドーパント』

・アップルドーパント

外見…全身黒タイツを着て、リングゴの被り物した刃野。

能力…医者に対して深刻なダメージを与える（はずだった）

# 小説版 刃野博士と真倉助手のガイア メモリ研究所

---

著者 バリー

発行日 2020年6月18日

ハーメルン-SS・小説投稿サイト-  
<https://syosetu.org/novel/189102/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。